

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の二

【原文・書き下し文】

- 1 日日尋<sub>レ</sub>春幾<sub>レ</sub>繡鞋  
ひひ 春を尋ぬるに幾繡の鞋
- 2 行遊<sub>レ</sub>那處暢<sub>レ</sub>吟懷<sub>一</sub>  
こうゆう いず 那れの処にか吟懷を暢べん
- 3 相憐<sub>レ</sub>薄暮啼<sub>レ</sub>花鳥  
はくぼ はな な とり あ あわれ  
薄暮花に啼く鳥を相い憐むも
- 4 可<sub>レ</sub>忍<sub>レ</sub>終宵呼<sub>レ</sub>雨蛙  
しゅうしやう あめ さけ かわず  
終宵 雨に呼ぶ蛙を忍ぶべけんや
- 5 粉蝶猶黏<sub>レ</sub>拾得<sub>レ</sub>箒  
ふんちょう なねば じつとく ほうちき  
粉蝶猶お粘る 拾得の箒
- 6 殘紅併束<sub>レ</sub>買臣<sub>レ</sub>柴  
ざんこう あわ たば ばいしん しば  
殘紅 併せ束ぬ 買臣の柴
- 7 嬌姿獨有<sub>二</sub>垂楊樹<sub>一</sub>  
きやうし た すいよう きあ  
嬌姿 独だ垂楊の樹有りて
- 8 笑<sub>二</sub>展娥眉<sub>一</sub>立<sub>二</sub>水涯<sub>一</sub>  
がび わらの みず きわ た  
娥眉を笑い展べて水の涯に立つ

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

- 1 ●●○○●●◎
- 2 ○○●●○○◎
- 3 ○○●●○○●
- 4 ●●○○○○◎
- 5 ●●○○●●●
- 6 ○○●●○○◎
- 7 ○○●●○○●
- 8 ●●○○●●◎

七言律詩

『広韻』上平十三佳(蛙・涯・柴)十四皆(鞋・懷)同用。『平水韻』上平九佳。

【校勘】

『清狂遺稿』以外に参照すべきもの無し。

【現代語訳】

其の二

毎日春の景色を愛でて歩いてはどれだけ草鞋を履きつぶしたとか、外に出掛けてどこで思いの丈を詠もうか。

日暮れ時に花のそばで鳴く鳥は愛おしいが、一晚中雨に泣き騒ぐカエルどもには我慢ならぬ。チヨウチヨはなお拾得の箒に貼り付いて、散った花は朱買臣の束ねた柴といっしょになってしまっている。

艶めかしい女性そのものの枝垂れ柳がぼつんと、微笑みかけるように水辺に立っている。

## 【解説】

この詩は、花が散り落ちた後のいたわしさを詠む。

## 【語釈】

1 尋春 春の景色を楽しむために訪ね歩く。唐、権徳輿「趙尚書〔高位の官職名〕の城南〔都長安の南郊外〕にて花を見て日晩れ先に帰りて寄せらるるに酬ゆ〔詩をお寄せ下さったのに対してお応えする〕（酬趙尚書城南看花日晚先歸見寄）詩に〈杜城・韋曲〔いずれも長安郊外の地名〕遍く春を尋ぬれば、処処繁花〔咲き誇る花々〕 満目〔目に映るところすべて〕 新たなり〔杜城韋曲遍尋春、處處繁花満目新〕。幾綱鞋 何足もの鞋。〈綱〉は鞋を数える量詞。楊公遠「張山長の韻を借りて方虚谷に呈す（借張山長韻呈方虚谷三首）其の二に〈帰り来たりて黙坐すれば心齋（心の雑念が取り払われて虚無の状態になること）の似く、南北〔南へ北へと旅するのに〕曾て穿く幾綱の鞋（歸來黙坐似心齋、南北曾穿幾綱鞋）〉。2 行遊 外をめぐり歩く。魏、曹丕「芙蓉池の作（芙蓉池作）一首」〈輦（手でひく車）に乗りて夜に行遊し、逍遙として〔ゆったりと〕 西園に歩む（乘輦夜行遊、逍遙歩西園）〉。那處 どこ。暢吟懐 心ゆくまで詩を吟じてみたい。〈暢〉は気分を伸びやかにさせる。〈吟懐〉は詩を詠みたいという思い。宋、林逋「梅花三首」其の一に〈吟懐 長に恨む芳時に負くを〔せいかくの花の盛りを逃してしまうのではないかと〕、梅花を見しが為に輒ち詩に入る（吟懐 長恨負芳時、爲見梅花輒入詩）〉。3 鳥が夕暮れになってもなお鳴いていることに作者自身の惜春の思いを重ねる。 相憐 ……というのが愛おしい。〈相〉はこちらから一方的にという意を含み、お互いにという意ではない。 薄暮 薄暗くなる黄昏時。 啼花鳥 花の近くで鳴きわたる鳥で、花も鳥も春の景物として欠かせない。明、皇甫昈「史考功〔官職名〕の池亭に題す（題史考功池亭）詩に〈軒に憑れば断えず 花に啼く鳥、戸を閉じれば応に逢うべし 竹を看る人に〔竹を愛していた晋の王徽之をいう〕（憑軒不斷啼花鳥、閉戸應逢看竹人）〉。4 可忍 我慢ならない。「久雨〔長雨〕」〔『清狂遺稿』下三四歳〕〈垣頹れ屋漏るるは猶お能く忍ぶも、秧田〔苗代〕の水底に沈むを忍ぶべけんや（垣頹屋漏猶能忍、可忍秧田水底沈）〉。 終宵 夜通し、一晚中。「備後の浜野箕山来訪せらるる

賦ふして贈おくる(備後濱野箕山見來訪賦贈)〔『清狂遺稿』上三三歲〕(此この夕ゆう門もんを開ひらきて旧識きゅうしき〔古くからの  
知人である浜野箕山〕を迎むかえ、終宵しゅうしやう 燭しょくを剪きりて〔ロウソクをより明るくするために芯の先の燃えかす  
を切り取る〕曾かつての游ゆうを話はなす〔むかし各地を巡り歩いたことを語り合う〕(此夕開門迎舊識、終宵剪燭話會  
游)。(呼雨蛙 雨に鳴きさわぐカエル。カエルの鳴き声で雨が降っていることを知り、それが  
花を散らしてせつかくの春が台無しになるので我慢ならないという。宋そう、許綸きりん〔劉知監ちかん官職名〕  
端午前一日に詩を以て甜苦筍〔甘苦い竹の子の色〕を送る 末章に香蒲〔端午の節句につきものの蒲草〕  
と酒壺〔酒の入った壺〕を謝絶するの句有るも、五絶句を以て酒を送る(劉知監端午前一日以詩送甜苦  
筍 末章有謝絶香蒲與酒壺之句、以五絶句送酒)其の三に(鳩は自ら晴に呼び蛙は雨に喚き、君の湖  
上じやうに西施せいし〔美女の名〕を看るを羨うらやむ(鳩自呼晴蛙喚雨、羨君湖上看西施)) 5粉蝶 チョウチョヨ。(粉)  
はチョウチョヨを覆っている鱗粉りんぷん。猶なほ それでもなお依然として。粘 チョウチョヨがねばり  
つくように止まっている。唐、皮日休〔胥口〔地名〕詩に(黒き蚊蝶〔黒いアゲハチョウ〕は蓮  
蕊〔蓮の蕊〕に粘り、紅き蜻蜓〔赤いトンボ〕は菱花に裏またわる(黒蚊蝶粘蓮蕊、紅蜻蜓裏菱花))。 拾得  
箒 寒山と並び称される中唐の高僧、拾得。卷物を持った姿で描かれる寒山に対して、拾得は  
箒を持った姿で禅画に描かれる。 6残紅 凋んで散り落ちる花々。 束 ひとつに束ねる。 買  
臣柴 前漢の朱買臣は四十を過ぎてても柴刈りをしながら読書に励み、後に漢の武帝に取り立て  
られた。 7・8 花はもうどこにもなく、美人に見立てられた岸辺の柳だけが残っていると詠む。  
嬌姿 なまめかしく美しい女性の姿。 垂楊樹 しだれ柳。宋、辛棄疾の詞「新郎を賀す(賀新郎)」  
に(嬌姿を望めば一に垂楊の裏やかなるが似し(望嬌姿、一似垂楊裏))、明、袁凱「吳宮の衰柳の凶  
に題す(題吳宮衰柳圖)」詩に(多情 独だ垂楊の樹有りて、猶お送る深宮 夜雨の声(多情獨有垂楊  
樹、猶送深宮夜雨聲))。 8笑展蛾眉 微笑んで眉根が広がる。(蛾眉)は蛾眉とも書き、蛾の触  
角のように美人の細い眉をいう。 立水涯 水際に立つ。後漢、杜篤「祓禊の賦」には、晚春の  
三月上巳〔三月初の日の日〕の川辺で身を清める禊みそぎに美しい女性が登場して(窈窕たる淑女  
〔たおやかな女性〕、美媵・艶姝〔いずれも美女〕、翡翠〔カワセミの羽〕を戴いたき、明珠を珥みにし、離桂  
〔衣のすそ〕を曳ひき、水涯に立つ(窈窕淑女、美媵艶姝、戴翡翠、珥明珠、曳離桂、立水涯))と詠まれる。